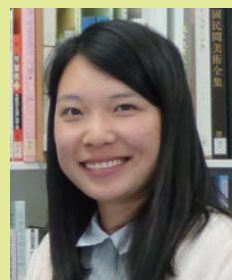


招聘 研究員

氏名	姚 琼 (YAO Qiong)
所属機関等	浙江工商大学 東亜研究院 日本文化研究所 研究員
受入期間	2016年5月16日～2016年6月5日
指導教員	小熊 誠
研究課題	中世における日本の疫病退散儀礼研究



日本古代の厄払い祭祀にみる中国文化の要素

姚 琼

Ⅰ 「儺（な）祭」の起源

中国では早くも春秋戦国時代に、厄払いの行事である「儺祭」に関する記載がみられた。戦国時代の文献『逸周書』第6巻で、「土牛」、「大儺」をめぐって「季冬の月は日が女宿座を指す。昏（くれ）に妻が南中する。旦（あした）に氏が南中する、その日は壬癸。これの帝は顓頊（せんぎょく）、その神は玄冥（水の神）。有司に命じて大いに儺せしむ。傍らにて磔（たく、引き裂く）して、土牛を出して以って寒気を送る。遠くの鳥は高く疾くとぶ。山川の神を奉り、帝や大臣、天地の神を広く奉る」という記述がある。これからわかるように、中国は戦国時代から、邪気を祓う目的で土牛を用いて追儺（ついな）の行事を行い、疫病を祭って疾病を駆除した。このほか『論語・郷党』などにも、儺（な）やらいについての記述がある。例えば、「孔子曰く、儺や鬼やらいを行う。先祖が驚くのを恐れ、朝服して阼階（そかい、東側の階段）に立つ」などである。『淮南子』第5巻にも、大儺祭祀の記述が残っており、以下のとおりである。「北宮に女を御する。黒衣の衣で黒采がある。警石（けいせき）を撃つ……（中略）役人に命じて、大いに追儺をし、四面で動物を磔して疾疫を禳ふ。土牛を出す」。

以上の史料が示しているように、儺祭は、大晦日に疫病を祓うために行われた祭祀行事である。儺が疫病や厄鬼のシンボルとして、祭祀の中で人々に追い出され、厄払いの目的が達成される。追儺の行事は、「宮儺」という宮中の追儺、と民間の追儺に分けられる。『論語・郷党』にある「郷の人の儺」は、民間の追儺行事に当たる。孔子でさえ礼服を着て肅々と追儺の行事を見守って

いたということから、民間の追儺行事も最初のころは、真剣で厳かに行われていたことがうかがえる。ところが、後漢時代になって、追儺行事は娯楽的な性質をはじめ、「軍儺」の形、すなわち軍の中で行われる追儺の儀式も現れていた¹⁾。

唐の時代になると、「儺祭」の娯楽性がさらに顕在化した。『旧唐書 志第四 礼儀四』では、当時の「儺祭」の情景を次のように記していた。

「立冬の後亥の日、都の郊外の西北に、司中・司命・司人・司禄（役職名）の祭壇が設けられ祭祀を行う。それぞれに羊一頭、籩（竹製の高坏）と豆それぞれ二つ、簠（穀物を盛る角型容器）、簋（穀物の容器）それぞれ一つ、冬の晦日の追儺を行う。宮殿の門及び四方の城門で動物を磔して、各雄鶏一羽用いる²⁾。

さらに『新唐書 志第六 礼楽六』では「儺祭」の盛大な場面がさらに詳しく記述されている。

大儺の礼。年齢十二以上の人を選ぶ、十六以下が僂子（しんし、わらべ）である。仮面をつけ、赤い布を腰に巻き付ける。二十四人が一隊、六人が一列、執事が十二人、赤い頭巾、赤い衣裳、麻の鞭。工人二十二人、其の一人が方相氏（ほうそうし）。仮面、黄金の四つ目、熊皮を被り、黒の衣、朱色の装束、右手に盾。その一人が歌を統率。仮面をつけ、皮の衣、こん棒をもつ。鼓、角笛それぞれ十、合わせて一隊になる。隊別に鼓吹令が一人、太卜（役職）令が一人、各部を監督する祈禱師二人。以て悪鬼を禁中（宮中）から追いはらう。有司に命じてどの門にも雄鶏および酒



を供える。宮の正門、城の四方の門で動物を磔いて祈禱する、祭壇を設ける。

(中略)

儺がまさに出る、祝(巫女役)が神の席を供える。中門に向かって南向きに出終わる。宰手、齋郎(役職)が神席の西にて動物を磔して、席に広げておく。頭は北に向ける。齋郎が清酒をつぐ。太祝(役職)が受け、祭る。祝史が版(ばん、祭場の位置を示す印)を座の右側に持ち、跪いて祭文を読み上げ曰く、「某年次月朔日(ついたち)、天子が太祝を遣し、その姓名を太陰神に告げる」。起き上がり、神席に版を擲(しば)る、いけにえの動物を酒と共に土に葬る³⁾。

上記の記述によると、唐の「儺祭」は年末の宮中行事であり、規模が盛大で隊列が多く、都の城門にことごとく祭壇が設けられ、さらに、合唱あり、打楽器演奏の工人の伴奏あり、方相氏と偃子の歌声が一体になり、祭祀が最高潮を迎え、人々が歓呼し、太鼓の音も激しくなり、遂には儺を城門の外に追い放したのである。『旧唐書 志第四 礼儀四』から『新唐書 志第六 礼楽六』への過程で、唐の時代の宮中行事としての「儺祭」の儀式的機能が弱まり、宮中の礼楽行事として大々的に行われるようになった。

一方、日本では平安時代に至って、儺祭がすでに一定の規模に達していた。例えば、平安時代の儀式書『延喜式』にこのような記載がある。

十二月大晦日の夕方、官人が齋郎を率い、承明門の外より待つ。時刻により禁中を共に入る。齋郎が食薦を持ち、庭に置き、祭物を列ねる。終わりに、陰陽師が入り、祭文を読む。「今年今月今時、時上直符、時上直事、時下直符、(中略)大儺公と小儺公が五兵を持ち、走り打ち付け、聞食(聞き召さ)を詔たす⁴⁾

以上、奈良時代から平安時代の日本の宮中の「儺祭」を、同じ時期である唐の「儺祭」と比べると、両者にはいくつかの違いがあることがわかる。まず一つ目が、日本の平安時代に行われた宮中の「儺祭」に対する上記の分析を通してみてきたように、奈良時代から平安時代までの「儺祭」は陰陽師の主導のもと、供え物を捧げて祀り、祭文を奉読し、さらに「大儺公」と「小儺公」が五兵を持って穢れを追い放すものだという点である。この中には礼楽の部分はなく、祭祀全体が荘厳で簡潔であった。この点は唐の時代の宮中の「儺祭」が娯楽性を帯び、礼楽を重視したところとは異なっている。

二つ目は、平安時代後期の日本の「宮儺」において、方相氏が、儺を追放する立場から、人々に追い出される

「儺」の象徴に逆転したという特徴があった。しかし、同じ時期の唐では、「宮儺」祭祀の中の方相氏は一貫して祭祀の主導者であり、人々を取り仕切って儺を宮中から追放する側であった。

三つ目の違いは、「儺祭」の最初の登場は先秦時代の農村祭りで、唐の時代になって宮廷の厄除け行事の体系に取り入れられたのだが、日本では「儺祭」が最初に登場したのが朝廷の祭祀の中である。

唐の律令制度の中の祭礼である「儺祭」が日本に伝えられてから、なぜこのような違いが生じたのであろう。おそらくこれは日本への文化の伝わり方に関係していると思われる。翁敏華氏が『儺文化の日本流と中国の源流の比較』の中で、「日本の朝廷の派遣による第6回遣唐使団は702年に唐に入り、704年に帰国した。この使節団は中国の宮廷で新年を迎え、年末晦日の夜に行われた宮中行事で、儺を追い払う儀式を見学した。これが、日本が706年に「初めて土牛を作り、追儺を行った」ことに通ずる可能性がある」と指摘している⁵⁾。唐の律令制度のもと、「宮儺」が日本に伝えられた当初は、唐の「宮儺」を踏襲し、ルールが完全に取り入れられていた。

しかし平安中期以降、日本の「国風文化」の台頭に伴い、隋や唐の律令制度が持つ日本への影響が次第に弱くなり、こうした文化背景のもと、日本の「宮儺」は、唐でのやり方と異なる形が作られていった。日本は飛鳥時代から平安時代後期にかけて、唐の律令制度に対する受容が変化をたどったといわれている。こうした変化を日本の「宮儺」の移り変わりの観点から裏付けることができる。

II 「道饗祭」の起源

道饗祭と疫病神祭が日本の史料に登場したのは8世紀初頭であるが、『大唐開元礼』、『唐六典』、『新・旧唐書』など唐の時代の官製の史料には、上述した二つの儀礼が現れていない。では、この二つの祭礼は、日本の我が国古代の祭礼に対する吸収と創造の中の、創造の部分に当たるのであろうか。仮にそうだとすれば、8世紀の奈良時代は唐の律令制度を全面的かつ積極的に吸収していたとされているため、いささか合致しないのではないか。『大唐開元礼』は『礼記』と『周礼』から来ていて、唐の当時の祭礼に関する資料を見回してみても、「道饗祭」と「疫病神祭」の記述を発見できない。しかし、『礼記』の中では、道路の祭祀に関する儀礼はすでに登場していた。「郷の人の禡、孔子、朝服して阼階に立つ」という引用は『礼記』から来たものであり、『論語・郷党』にも類似した記述があった。

すなわち「郷の人の儺、朝服して阼階に立つ」である。「禡」について、『説文解字』の注釈によれば、「道



上の祭。禡（しょう）また獻（けん）、また儺である。云うや行う者は、音が違うが読んで理が通ずる。禡の音は獻や儺の音と大きな違いがある。そもそも禡と書く字である。わかりやすい音を示したため、獻や儺との差が近くなった。徐仙の地域の発音は禡が儺で、もともと禡の字が、伝わるうちに儺と呼ぶようになった」ということである。

つまり、『礼記』の中にすでに、郷里の人が道の上で祭祀を行うしきたりがあって、「儺」の原型が「禡」であり、なまりが似ていたため、次第に「儺」と言い伝えられるようになったのである。この記述は、「儺祭」が道路上の祭祀から発展してきたという歴史的な変遷をうかがわせるものである。「禡」が道端の祭祀であったとするならば、「道饗祭」は、「禡」から変化してきたものだったのだろうか。「禡」の変化の歴史についてはさらに時代を考証する必要がある。

ところで、唐の祭礼に関する史料から「道饗祭」に触れた記述はまだ見当たらないが、筆者はいくつかの手掛かりを見つけている。清の呉任臣が編纂した紀伝体の史書『十国春秋』では、呉越福州の刺史（知事）、銭昱が建てた『忠懿王廟碑銘』のことが記されている。石碑の銘文は、王審知就任時の福建地域に対する統治の功績を褒めたたえていた。内容の一部が、「尊賢の志を抱き、愛客の道を発揚、四方の名士、万里はるばる来たり……（中略）天地の神を尊び、道饗神を奉納し、ひたむきで誠実、その徳を見るに十分である」となっている⁶⁾。

大まかな意味としては、王審知という人が福州に赴任していた間、開明でうまく統治して、天地の神々を敬い祭り、「道饗」の祭祀も行っていたということである。

我々はここで、唐の末期、五代の時代、福州で行われた「道饗祭祀」の記録を見ることができる。王審知（862-925年）は「開閩三王」の一人といわれ、ほかの二人の王である。王潮、王審邽とともに885年に農民蜂起を起こし、農民を率いて福建に入り、福建地方の統一を図った。彼は後梁時代の開平三年（909年）、閩王の王位を与えられ、17年間在位した。閩王として福建を統治していた間、当時先進的だった中原の文化を積極的に広め、商業と海上貿易を発展させ、福州と泉州を我が国東南部の重要な港にした。これらは当時の中国の二大港湾都市となった。

このように、「道饗祭」が当時の中原文化の一つとして、王審知によって福建省にもたらされ、現地の祭祀儀礼として根付いたということが推測できよう。すなわち、唐の末期、五代の時期には、中原地域及び福建地域では「道饗祭」を行う風習がすでに存在していたのである。

【注】

- 1) 馬興國『中日歳時節令習俗の異同の分析』（『比較文化、中国と日本』吉林大学出版社、1996年、p. 246）
- 2) 『旧唐書 志第四 礼儀四』
- 3) 『新唐書 志第六 礼楽六』
- 4) 黑板胜美『新订増補国史大系・延喜式』、東京：吉川弘文館、2007年、p. 443
- 5) 翁敏華『儺文化の日本流と中国の源流の比較』、上海師範大学紀要、1992年
- 6) 呉任臣『十国春秋 卷九十一』、中華書局、1983年、p. 1317

日本古代瘟神祭祀的中国文化元素

浙江工商大学 姚 琼

1. “儺祭”的起源

早在中国的战国时代就有对瘟病祭祀“儺祭”的记载。战国时代的历史文献《逸周书》第6卷对“土牛”、“大儺”有“季冬之月，日在婺内，昏娄中，旦氏中，其日壬癸，日其间顛頊，其神玄冥、有司大儺，旁磔出土牛，以宋寒气，征鸟厉疾，乃毕行山川之祀，及帝之大臣天地之神祇”的记载。从这条记载可以看出，中国早在战国时代已经开始利用土牛举行大儺，用来祭拜瘟病驱除瘟疫。除此之外，《论语·乡党》中，对驱儺也有记录，“孔曰：驱儺逐疫鬼，恐惊先祖，故朝服而立于庙之阼階”。《淮南

子》的第5卷亦有记载大儺祭祀，“北宫御女黑色衣，黑采，击磬石…（中略）朝于玄堂右个。命有司，大儺旁磔，出土牛”。由以上史料可以看出，儺祭是在年末晦日用来驱除疫病而举行的祭祀仪礼，儺作为疫病·疫鬼的象征在祭礼中被众人驱逐，由此达到祛疫的目的。儺祭又分为“宫儺”和民间儺，《论语·乡党》中的“乡人儺”即为民间儺的分类。从孔子尚衣冠整齐地肃立在一旁，参观这种儺仪来看，民间儺开始也是很严肃庄重的¹⁾。然而，后汉时期的儺祭已初见其娱乐性的端倪，并出现了“军儺”的形式，即在军队中举行追儺仪式。



到了唐代，“傩祭”的娱乐性进一步地显现出来。《旧唐书·礼仪志第四》中就记载了当时的“傩祭”的情景，“立冬后亥，祀司中、司命、司人、司禄于国城西北。各用羊一，笏、豆各二，簠、簋各一。季冬晦，堂赠傩，磔牲于宫门及城四门，各用雄鸡一²⁾。”除此之外，《新唐书·礼乐志第六》中对“傩祭”的盛大场面有更为详细的记载：

大傩之礼。选人年十二以上、十六以下为侏子，假面，赤布袴褶。二十四人为一队，六人为列。执事十二人，赤帻、赤衣，麻鞭。工人二十二人，其一人方相氏，假面，黄金四目，蒙熊皮，黑衣、殊裳，右执楯；其一人为唱帅，假面，皮衣，执棒；鼓、角各十，合为一队。队别鼓吹令一人、太卜令一人，各监所部；巫师二人。以逐恶鬼于禁中。有司预备每门雄鸡及酒，拟于宫城正门、皇城诸门磔攘，设祭。（中略）

傩者将出，祝布神席，当中门地南向。出讫，宰手、斋郎牲凶磔之神席之西，藉以席，北首。斋郎酌清酒，太祝受，奠之。祝史持版于座右，跪读祝文曰：「维某年岁次月朔日，天子遣太祝臣姓名昭告于太阴之神。」兴，尊版于席，乃举牲并酒瘞于埴³⁾。

从《新唐书·礼乐》对“傩祭”的记载来看，唐代的“傩祭”作为年末宫廷祭祀，其规模盛大，队列众多，皇城诸门皆设祭，且有唱帅及鼓吹工人伴随，至方相氏与侏子唱和之际，祭祀达到高潮，众士欢呼，鼓噪而出将傩赶出城门外。从《旧唐书·礼仪志》中的“傩祭”到《新唐书》的《礼乐》，可以看出唐代宫中的“傩祭”作为祭礼的功能被逐渐弱化，“傩祭”开始被作为宫中礼乐大规模举行。

日本方面，平安时期宫廷的“傩祭”已达到一定的规模。如平安时期仪礼书《延喜式》所载：

十二月晦日昏時，官人率齋郎等候承明門外。即依時剋共入禁中。齋郎持食薦安庭中，陳祭物。訖，陰陽師進讀祭文。其詞曰：「今年今月今日今時，時上直符，時上直事，時下直符，（中略）大儺公，小儺公，持五兵追走刑殺物聞食詔⁴⁾。

如果将奈良至平安时期日本宫中的“傩祭”与同一时期唐代的“傩祭”相比较，就会发现两者有以下几点不同：第一，在上文对日本平安时期宫中的“傩祭”的分析中，我们看到奈良至平安时期的“傩祭”在阴阳师的主导下祭祀贡品，奉读祭文，再由“大傩公”“小傩公”持五兵氏赶走秽物，这其中并无礼乐的部分，整个祭祀庄严、简洁，这与唐代宫廷“傩祭”带有娱乐性注重礼乐有所不同。第二，平安后期日本的“宫傩”中，方相氏由追傩人转向被众人追赶的“傩”的象征，而在同一时期唐代的“宫傩”中，方相氏始终作为祭礼的主导者，指挥众人将傩赶出宫中。第三，“傩祭”最先出现于先秦时期的乡祭

中，到了唐代进入到宫廷瘟病祭礼系统中，而日本的“傩祭”则最初出现在朝廷祭礼中。

作为唐代律令制度中祭礼的“傩祭”传入日本后为何会出现如此的不同之处，恐怕与这一文化现象传入日本的方式不无关系。翁敏华在《傩文化的日本流与中国源之比较》研究中提到，日本朝廷派出的第六次遣唐使团与702年赴唐，704年返国，这一使团在中国皇宫过了新年，并在唐朝除夕夜的宫中大傩仪中观看了追傩仪，这为日本706年的“始作土牛、大傩”提供了可能性⁵⁾。唐代律令制度下的“宫傩”在传入日本之初，基本沿袭了唐“宫傩”，并完全接受了傩祭的规范。然而，平安时候中期，随着日本“国风文化”的逐渐兴起，隋唐以来的律令制度对日本的影响逐渐减弱，在这种文化背景的影响下，日本的“宫傩”开始出现不同于唐的举行方式。日本从飞鸟时期至平安后期对唐代律令制度吸收情况的变化，在日本“宫傩”的演变史中得到印证。

2. “道飨祭”的起源

道飨祭和疫神祭出现在日本史料中的时间为8世纪初，然而在《大唐开元礼》、《唐六典》、《新·旧唐书》礼仪志等唐代官方撰写的史料中却没有出现过以上两种祭礼。那么，这两种祭礼是否属于日本对我国古代祭礼摄取与创新中“创新”的部分呢？如果是这样，似乎与8世纪奈良朝全面积极吸收唐律令制的发展阶段有些不符。《大唐开元礼》取自《礼记》和《周礼》，纵览记载唐代祭礼的史料中尚未发现关于“道飨祭”与“疫神祭”的记载，但在《礼记》中却已出现在道路祭祀的仪礼。“乡人禘，孔子朝服立於阼”出自《礼记》，在《论语·乡党》中有类似的记载，“乡人儺，朝服而立於阼階”。“禘”《说文解字》注“道上祭。禘或為獻、或為儺。凡云或為者、必此彼音讀有相通之理。易聲與獻儺音理遠隔。記當本是禘字。從示易聲。則與獻儺差近。徐仙民音禘為儺。當由本是禘字、相傳讀儺也”，也就是说在《礼记》中已经出现了乡人在道路上祭祀的例子，“傩”本为“禘”，因乡音相近，后被人相传读为“傩”，由此可以看出，“傩祭”存在从道路上的祭祀发展过来的历史演变过程。既然“禘”是道路上的祭祀，那么“道飨祭”是否是“禘”演变过来的呢。

关于“禘”的发展演变史，还需要进一步的考证。但是尽管唐代祭礼的史料中没有出现对“道飨祭”的记载，但笔者还是发现了一些蛛丝马迹。清人吴任臣编撰的纪传体史书《十国春秋》中记载了吴越福州刺史钱昱为所立《忠懿王庙碑铭》，盛赞王审知当政治理闽地的功绩，其部分内容如下“怀尊贤之志，宏爱客之道，四方名士，万里咸来…（中略）尊天事地，奉道飨神，無非克誠，足以監德⁶⁾。”大概意思是赞扬王审知来闽治理期间，开明治理，尊天事敬地祇，并奉行“道飨”祭祀，这里我们找到了唐末五代在福州举行“道飨祭祀”的记录。王审知



(862年-925年)为“开闽三王”之一,与其他“二王”王潮、王审邽于885年在河南固始县率领农民起义军入闽,统一福建,后梁开平三年(909)封闽王,在位十七年。闽王治理福建时期,积极传播和引进当时先进的中原文化,发展商业和海上贸易,让福州和泉州成为我国东南沿海的重要港口,也是当时中国最大的两个港口。因此,我们可以推测,“道飨祭”也是作为当时中原文化之一,被王审知带入福建,成为了当地的祭祀礼仪。也就是说,在唐末五代时期中原以及福建地区已经有举行“道飨祭”的习俗。

[注]

- 1) 马兴国:《中日岁时节令习俗异同辨》,《比较文化:中国与日本》吉林大学出版社,1996年,第246页。
- 2) 参照《旧唐书·志》第4卷。
- 3) 参照《新唐书·礼乐》第6卷。
- 4) [日]黑板胜美编:《新订增补国史大系·延喜式》,东京:吉川弘文馆,2007年版,第443页。
- 5) 翁敏华:《雉文化的日本流与中国源之比较》,上海师范大学学报,1992(2)。
- 6) (清)吴任臣:《十国春秋·卷九十一》,中华书局,1983年,第1317页。

